

日本声楽発声学会

学会通信 41号 2019年（平成31年）3月発行

会員の皆さま

2019年4月、新しい年も軌道に乗りますますご活躍のこととお喜び申し上げます。今年、平成の時代から新元号に変わる元年の最初の学会通信です。

2016年6月より、私は会長を拝命し、この2019年5月末日の3年間をもって、微力ながら会長としての責務を終える時となりました。会長、理事の役目は当学会の企画運営を務めることにあり、その重責において誠心誠意頑張って参りましたが、如何ほどのことが出来ましたか省みて反省することばかりです。

この3年間の私の責務への印象は、年々歳々変化する世相のニーズに合わせ、本学会の研究目的がより進展の方向にあるか否かに目や心を配る日々であったように思います。恒例の年2回の例会と夏季研修会の充実したプログラムを企画し、その都度のご依頼講師の方々のご専門を生かして頂けるように、内容に心配りしたことであります。

また運営におきましての一番大きな仕事は、学会の諸規程の見直しでありました。会員の皆さまの要望に耳を澄まし、学会の組織の在り方を見直した諸規程改定は、2018年5月の第54回総会で、その条項のすべてを会員の皆さまにお認め頂きました時は、この上ない喜びでありました。

そして今年度は、会長、理事の交代のための改選期にあたり現在選挙続行中ですが、諸規程に添って選挙資料を作成致しますについては、その資料作りに選挙準備委員会は事務局と共に多くの時間をかけて作成致しました。その中でも、会員の皆さまの名簿作成は、事務局および選挙準備委員会の仕事の一番の要であります。連絡を密に行っていたにも拘わらず被選挙権者のお名前の記載漏れをしまいご迷惑をおかけいたしました。会員の皆さまの流動ある動向に細心の注意を払う日々と云って過言でない目配り、心配りをご理解頂ければ幸いです。

その他、当学会発足以来、55年の歳月の間に、溜まりに溜まりました「学会誌」や、主宰する例会の記録を残すための録音録画機材など、これまでの事務担当、記録担当の方々のお宅に、長年お預かり頂いて参りましたものを整理し、一堂に集め保管することは、理事会の長年の念願でありました。積み重ねた本学会の歴史の資料は、集め

てみますと相当な量でありました。しかしそうたやすく処分できる物ではないことを充分認識し、12名の理事の先生方と共に一丸となって整理致しました。当学会が以後連綿と続くことを鑑みて、保管の方法には知恵を絞り一応収めました。しかし保管場所には費用もかかり、また個人のお宅にお預かり頂く好意にすぎるのも心苦しく、これから良策を考えねばなりません。

まだまだ思い残すことは多々あり、微力にして果たせなかった責務を残してしまいました。日々変化発展していく国際社会を目指し、日本声楽発声学会が、科学的理論解明を携えての発足当時の発意を基本に置いて、ますます「表現の基本を作る発声」のより深い研究がなされる集団となりますよう、今後も一会員として寄与できることを願って、この場をお借りして、会長（2016年6月1日～2019年5月31日間）としての最後の挨拶とさせていただきます。

2019年3月 会長 永井和子

1. 訃報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

嶺 貞子先生 顧問 東京藝術大学名誉教授 2018年10月13日ご逝去。

丹羽勝海先生 顧問 日本大学芸術学部・大学院教授・声楽家 2019年1月29日ご逝去。

2. 丹羽勝海先生への追悼の辞

丹羽勝海先生のご逝去にあたり、哀悼の意を表します。

丹羽勝海先生は2019年1月29日 享年80歳にてご逝去されました。

先生の日本声楽発声学会におけるご略歴をご紹介して、ご生前の先生を偲びたく存じます。

先生は、本学会に於いて、昭和58年（1983年より）理事に就任なさり、平成元年（1989年）に理事長にご就任、以来4期平成12年（2000年）までの長きに亘って理事長のお役目を全うなさいました。その後、副理事長として米山文明先生のブレーンとして本学会をお支えくださいました。ご定年後は、顧問としてご助言を頂きながら、学会の行く末を見守り下さり今日に至っております。

なお、先生の本学会に於けるお働きとご功績として特筆すべきは、「日本学術会議」の公認団体として正式な学術的研究団体の学会となるために大きなご尽力を頂き、学

会の確固たる研究団体の今日を築いてくださいましたことを付記させていただきたく存じます。

感謝と共に、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

2019年2月6日 日本声楽発声学会 会長 永井和子

トラ・トラ・トラ 丹羽勝海氏追悼の辞

山田 実（日本声楽発声学会顧問）

平成25年6月発行の、東京藝術大学音楽学部同声会名簿の昭和33年度卒業生声楽科B（バス）欄に、丹羽勝海の名があります。同期生に淡野弓子、三林輝男、平野忠彦の諸氏がおられたようです。

在学中、磯谷威先生に師事された頃はバスでおられたのですが、その後テノールに転向され、“Tenors are not to be born, but to be made”を、文字通り実行され、その後、日本で初のカウンターテナーと云う、男声の3声部全ての幅広いレパートリーを持たれた事は、天性に加えて、発声法の研究に並々ならぬ努力をされた事が窺えます。

筆者が最初にお目にかかったのは、1961年頃だったでしょうか、ニューヨークの教会でリサイタルをされた時、当時、ジュリアード音楽院でジェニー・トウレル教授の元でフランス歌曲を学んでおられ、プログラムもフランス歌曲と日本歌曲、そしてそれぞれを聴衆に英語で丁寧に説明されていた事を明瞭に記憶しています。

ご帰国後の1966年、第1回民音コンクールで優勝。翌1967年、テノールに転向され、二期会公演のピンカートンでデビューされて以来、NHKのニューイヤーオペラコンサートに10年連続で出演されるなど、演奏活動には枚挙の暇がありません。詩と音楽の関連にも深い造詣を示されました。非常に多才な方で、画家として素晴らしい作品を沢山残されておられます。美術館によく足を運ばれ、例会の時も、途中エスケープして美術展に行かれた事もあり、家内が日芸大学院を首席で卒業した時、お祝いに素敵な抽象画を戴きました。

1985年、“男はつらいよ”シリーズの寅次郎恋愛塾編で神父役を演じられ、池袋駅で見知らぬ人から、「神父さま、いつ上京なさったのですか」と声をかけられた事もあったと伺いました。

海外での邦人作品の紹介にも尽力され、ロンドンで開催された第4回国際声楽指導者会議（ICVT1997）では、門下生を中心として組織されたアポロンの会10名ほどで吉松隆氏のネオオペラ、セレスタを主演、演出され、ICVTの当時会長、ケンジー先生から、“His voice is the biggest in the world”と評されました。largestではなく、biggestと評されたのには、深い意義があります。largestは、大声、怒鳴り声などの意味があ

りますが、biggest は、立派な声、偉大な声を意味します。

また、柴田南雄作曲“忘れられた少年～天正遣欧少年使節”の豊臣秀吉役でローマ公演の際、舞台衣装のままでローマ法皇と会われた写真が残っています。

上記以前にも 1961 年、カリフォルニア大学で、清水脩作曲、修善寺物語の夜叉王を、バス歌手として演じられています。

本学会に於いては、1983 年より理事に、1989 年、理事長に選出され、以降 4 期、2000 年までの長きに亘って理事長の重責を負われ、会員の増加、研究発表の向上、例会の充実に、多大な貢献をされました。その後も、米山理事長のブレーンとして、また、顧問として、学会のためにご助言を戴きました。

本年 1 月 29 日、うっ血性心不全のため、80 歳で逝去されました。表題のトラトラトラは、2001 年に発売された CD のタイトルですが、ご本人がトラ年、ご子息がトラ年、お孫さんもトラ年と嬉しそうにして話され、とらやの羊羹が大好物でおられました。

喪主を務められた、ご長男一貫氏が、ご挨拶で「声楽第一の父でしたが、家庭では、仕事の話や、人の悪口を一切言わない、穏やかで静かな父でした。」とおっしゃられ、お見送りには、ご長女理恵子様が、「千の風になって」を献歌されました。

感謝で一杯です。どうぞ静かにお休み下さい。



3. 第109回例会 / 第55回総会 ご案内

日 時 2019年5月26日(日) 9:55 ~ 16:30 (受付9:30~)

場 所 東京藝術大学 5-109 (大講義室) (予定)、第1ホール
(JR上野駅公園口より徒歩10分)

プログラム

A講座：研究発表 10:00 ~ 11:05 5-109 (大講義室) **司会：齊藤 祐**

1. 神林 恭氏 (かんばやし きょう) 10:00 ~ 10:30
(神林歯科理事長、米山文明呼吸と発声研究所指導者資格取得 会員)
テーマ：歌唱と顎関節～顎関節症について
2. 山内昌也氏 (やまうち まさや) 10:35 ~ 11:05
(沖縄県立芸術大学准教授 会員)
テーマ：琉球古典音楽歌三線について

第55回総会 11:15 ~ 12:15 5-109 (大講義室)
--

B講座：特別講演 13:00 ~ 15:00 5-109 (大講義室) **司会：佐々木正利**

講 師：田中昌司氏 (たなか しょうじ)

上智大学理工学部情報理工学科教授 (音楽脳の研究)

(Dept. of information & communication Sciences Sophia university)

演 題：音楽脳の特徴と声楽演奏時の脳活動

概 要：教育・研究活動状況

脳科学の研究をしています。手法は、脳イメージングによる脳内ネットワークの解析です。順天堂大学との共同研究です。音楽脳の研究がメインで、音大生の参加を得て実験を行っています。上智大生の脳データと比較することによって、幼少期からの継続的な音楽トレーニングによってどのような音楽脳がつくられていくのかということや、音楽トレーニングが脳のどのような(構造・機能)ネットワークを用いているのか、音楽が脳(心)にどのような(またどのようにして)影響を及ぼすのかということ等を研究しています。このプロジェクトを通して多くの研究者や学生と出会い、また、いろいろな大学・学部の学生・院生が被験者として実験に参加してくれていることに心から感謝しています。

プロフィール :

国内 1986年-2008年 上智大学理工学部電気電子工学科 (講師、助教授、教授) ワーキングメモリー、前頭前野神経回路の研究

2008年-現在 上智大学理工学部情報理工学科 (教授) 音楽脳の研究 (脳イメージング解析)

国外 1998年 Yale 大学医学部 (客員科学者) ワーキングメモリー、前頭前野神経回路の研究

2005年 Columbia 大学医学部 (客員教授) PET modeling

2007-2011年 University of California, San Diego マウスの多次元行動モデル

学歴及び学位

名古屋大学 工学部 電気電子工学科 1980/03/25 卒業

名古屋大学 工学系研究科 電気工学 修士 1982/03/25 修了 工学修士

名古屋大学 工学系研究科 電気工学 博士 1985/03/25 修了 工学博士

C 講座 : 現役声楽家の演奏とお話 15:20 ~ 16:20 第1ホール 司会 : 川上勝功

講師 : ニコラ・ロッシ・ジョルダーノ氏 (テノール)

ピアノ : 早川揺理氏 通訳 : 栗原利佳氏

曲目 : 「Tristezza 悲しみ」 トスティアー 作曲

オペラ “トスカ” より 「星も光りぬ」 プッチーニ 作曲

「カタリ カタリ」 カルディッロ 作曲 他、

概要 :

1. 来日してから、日本人の方々をレッスンしていて気が付いたこと。
ベルカント唱法に絶対不可欠な『APPOGGIO』『アッポッジョ』についての指導と説明が十分にされていないこと。
2. もう一つ重要なこと。『息の上で歌う』と『息で歌う』ことの違い。
『アッポッジョ』、必要な十分な圧力をかけながら、『息の上で歌う』と、声帯に負担をかけて押して歌う必要がなくなります。
3. 『VOCALFOCUS』ヴォーカルフォーカス『声の焦点を合わせる』ことについて、これらの3つのことがもっとも重要な伝えたいことです。
『APPOGGIO』『Cantare sul fiato』(息の上でうたう)、『Vocal Focus』
これらのテクニックを実際に声を聴いていただきながら、分かりやすく説明させて頂こうと思います。

プロフィール :

イタリア、ジェノヴァに生まれる。2000年、スペイン、コルトヴァ国際コンクールを皮切りに数々の国際コンクールにて優勝。オペラ「アイダ」のラダメス役で、エジプト・カイロでデビュー以来、世界最高峰の演出家フランコ・ゼフィレリに見出され、その後、前代未聞のスピードで

世界主要の劇場でデビューを果たし、「シモン・ボッカネグラ」「蝶々夫人」「トスカ」「ノルマ」等々、主要なオペラの主役を次々とこなすその数は、ここに挙げるに絶するほどにあり、氏の歌声はまさに世界中を魅了している。

***栗原利佳氏（くりはら りか）（通訳）**

フェリス女学院大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了。2004年スペーツィアカルロ国際声楽コンクール優勝。2006年イタリア、サボーナで行われたポンティンブレア国際声楽コンクール優勝。二期会会員。

***早川揺理氏（はやかわ ゆり）（ピアノ）**

フェリス女学院大学音楽学部器楽学科卒業。東邦音楽大学総合芸術研究所ピアノ伴奏法コース修了。

日本声楽発声学会 第55回総会次第

日 時 2019年5月26日（日） 11:15～12:15

会 場 東京藝術大学 5-109（大講義室）

1. 開会の挨拶
2. 議長の挨拶
3. 議 題
 - (1) 2018年度（平成30年）事業経過報告
 - (2) 2018年度（平成30年）収支決算報告
 - (3) 2018年度（平成30年）会計監査報告
 - (4) 上記（1）、（2）、（3）の承認
 - (5) 2019年度（新元号）事業計画案審議
 - (6) 2019年度（新元号）予算案審議
 - (7) 上記（5）、（6）、の承認
 - (8) 役員・会員の動向
 - (9) 選挙結果報告—新理事発表および紹介
 - (10) 上記（9）の承認
 - (11) 新会長互選結果報告
 - (12) 新会長挨拶
 - (13) 議長総会終了宣言
4. 総会閉会の挨拶

4. 臨床音声学研究会のご案内

以下の通り、臨床音声学研究会東京を開催いたします。

2019年5月25日（土）午後5時から午後7時。

場所：帝国ホテルミーティングルーム

（帝国ホテル本館5階、TEL 03-3504-1111、千代田区内幸町1-1-1）

声楽発声学会会員で医師関係の人が中心に行っている研究会ですが、どなたでも参加は自由です。参加費は1000円です。

参加希望者は氏名と連絡先を記載の上、5月18日までに竹田までお願いします。

（FAX 03-5313-3281、またはe-mail：CQN00234@nifty.ne.jp）

竹田数章 仙川耳鼻咽喉科院長

5. 夏季研修会の報告／感想文

A講座 現代日本の作曲家シリーズ講座V

講演テーマ：声楽作品の価値

講師：青島広志氏

青島氏の持つマルチな才能については、知る人ぞ知るの感があります。今回40～50年ぶりに青島氏ご本人に接することができました。私ごときが彼について評するのは、大変おこがましいことと思いながらも、会員の皆様にも、より一層の理解を深めていただく為に、敢えて私個人が感じたままを書かせていただきました。

まず、歌曲集“少女の季節”の冒頭で、「この歌曲集の出版に踏み切ったのは、私にとって大決断です。最初にそのお話を受けてから5年間も躊躇していたのは、複雑な気分のせいです。云々。」「私には気弱なところがあるらしく、自分の能力を全く信じていません・・・。」「自分の作品の回顧展を見て、私は自分の過去と決別したい思いにかられました。」「それ以上の作品を世に問えないと直感したからです。云々。」と書いておられました。

当日、ご本人から自らの生い立ちについて語られ、幼少の頃は周り中女性だらけの環境の中で、言葉遣いや、仕草に到るまで「女の子」のように育てられ、自分は将来は「女性」になるんだと信じていたとのことでした。立て板に水のごとく饒舌なおしゃべりで大いに笑わせ、会衆の心をしっかりと青島広志の世界に引き込んでおられました。

ひとり一人の受講生へのレッスンも、歌唱に於ける日本語の発音法、発語法、そし

て表現法に到るまで、長年多くの声楽家と組んで研鑽を積み、培って来られた実績を持って、我々、声楽家顔負けの指示をされておられました。

歌曲にしる、オペラのアリアにしる、技術的な解決方法や、曲へのアプローチ、すなわち、自ら書かれた詩の解釈（単語に内在する意味）や、その表現方法が、高い見識の内にとても解り易く伝えられ、受講生のレベルが高かったことから、それぞれが適格に要求に応じておられました。曲の良さと演奏の良さが一体となり素晴らしいものとなりました。

彼が自ら語る「気の弱さ」と言うのは、王様の集まりのような音楽家達の中で、彼が「女性っぽく映る」ことから来ているのではないかと私は思いました。勿論、それが全てではないにしる、青島氏の持つ人間的な謙虚さが、そう思わせているのではないかと思いました。

青島さん、音楽家であることをやめないで益々活躍していただきたいものです。

川上勝功

B 講座 F. フースラー研究者による研究発表講座

講演テーマ：『うたうこと』（F・フースラー／Y・R・マーリング著、須永義夫／大熊文子訳）の読み方

講師：移川澄也氏

講師の移川澄也氏は、講演の中で数曲の歌曲を演奏して下さったので、それについて感想を述べたい。

先ず最初に歌われたのは「Caro mio ben」だった。この曲は、中高校生にもよく歌われる曲だから、夏期研修会の中で、而も声楽専門家を前にして歌うと言う事について、ご本人の何らかの意図が有ったと思われる。それが何であるかは、出席した各人が想い致す所であろう。私は、氏の演奏を初めて聞いたが、その発声と音色やディクシヨンの秀逸さは、特筆に値すると感じた。ゆくりなくも昔、ミラノのスカラ座で聴いた「シモン・ボッカネグラ」を歌うチェーザレ・シエピの声を、そこはかたく思い出していた。バロックの演奏様式としては、テーマが繰り返されるフレーズでは装飾を施すのが常道だが、装飾は加えられなかった。恐らく何か意図が有ったと思われる。次の曲は「Nel cor piu' non mi sento」だった。この曲は、歌い方が2つ有ると思う。1つは、大真面目に歌う。もう1つは、こわいりを駆使してスケルツォ風に歌う。氏は、前者の解釈で歌ったのだが、恋と言うものを初めて経験し、どうしていいか分からずに右往左往する様子が、大真面目な歌い方から立ち上って来た。私の場合は、こわいろを使って表現するのだが、氏の行き方も其れはそれでいいなと感じた。少々気になった所があるが、それは音程をずり上げる歌い方である。バロック音楽というのは、300年～400年前の音楽で、ロマン派では無いから、ピッチを水平に取った方がいいと

私は思うが、人によって立場が色々有るかも知れない。

そのロマン派の作品からは、トスティの「Malia」が演奏された。ピアノ伴奏の音型や音楽の内容から、多少テンポを揺らしたり、強弱の対比を出した方がいいと私は考えるが、穏健なオーソドックスな演奏だった。

とまれ、氏の演奏を十二分に楽しむ事が出来たし、掉尾に書き加えるべきは、イタリア語の正確さと美しさだった。

泉 恵得

C 講座 音声生理学講座

講演テーマ：臨床医の立場から実証例、声を守るための一提言―声の悩みと向き合って 35 年―

講師：文珠敏郎氏

もう随分前から、関西の音楽家の方に、「文珠先生のお話は、目からうろこよ～」とお聞きしていましたので、お話を伺う機会をお待ちしておりました。文珠先生は、暑さ厳しい中、大阪から、発声学会夏季研修会のためにいらしてくださいました。

今回は、「臨床医の立場から実証例、声を守るための一提言」についてご講演を賜ることができました。音楽家をはじめ職業的音声使用者の声の悩みの相談医として 35 年の長きに渡り診療に携わり、患者に向きあってこられた文珠先生は、音楽家の診療手順、音声生理学についてわかりやすく丁寧にお話ししてくださいました。有意義な質問時間もありましたが、講演終了後も質問の長い列ができてお答えくださいました。改めて誌上をお借りしてお礼申し上げます。内容は次回の学会誌に掲載されます。その中で折々に、音楽家の皆様にご覧いただきたい項目は、「自分の声を守るためのケア（声の衛生管理、こんなことをしたら声を痛めますよ）」です。「音楽家にとって声は命の次に大切」ですから、日頃から歌声障害の予防に努め、いつまでも美しい歌声を保ちたいものです。

西浦美佐子

D 講座 『歌の集い』演奏会（日本音楽発声学会会員による演奏会）

「歌の集い」は一切の批評を行ないません。2018 年度夏季研修会 D 講座「歌の集い」がどのようなものであったかを感想としてお伝えさせていただきます。演奏会内容は、齋藤祐氏（テノール）、浅香貴子氏（ソプラノ）、宮城朝陽氏（テノール）、大垣ひでみ氏（ソプラノ）4 名の独唱者、永原恵三氏指揮コーラス淡水の男声合唱 1 組、そして永井和子氏のレクチャー・演奏でした。

独唱陣と合唱の演奏曲はドイツ歌曲、日本歌曲、イタリア作品で、それぞれに日頃

の研鑽がうかがい知れる演奏を披露くださいました。各独唱はピアニストと息の合った演奏であり、ピアニストと共に創造される表現の奥深さと可能性が示唆されたと思います。男声合唱による日本の歌は、力強さの中に優しさのこもった響きで会場を魅了しました。終演後、聴いた方々から出演者が賞賛の声を受けているのが見受けられました。司会者に直接お話くださった中に、「作曲者自身の伴奏での演奏を始めて聴くことができ良かった」とのお言葉がございました。また、学生会員の演奏に豊かな将来性を見た先生から、留学への大変に貴重な具体的アドバイスを頂きました。若い才能の育成に対する本学会の潜在能力が示されたと思います。今後も学生会員の皆さまにも歌の集いを大いに活用して頂きたいと思います。

永井和子氏のレクチャー・演奏は、「歌うこと 聴くこと その感覚の捉え方」について、音声はその人の「感覚」が拠り所となること、その感覚には、生命体に内蔵する「音楽的イメージ」や「肉体的感覚」が暗黙的に存在し関与することを、演奏とお話しを交互にして丁寧に解り易くご説明くださいました。

長年のかけがいのない共演体験が滲み出ている永井譲先生の伴奏で、永井和子先生はやわらかく若々しい歌声で演奏なさいました。

日頃からのお考えである、「研修を継続しつつ歌い続けること」の素晴らしい効果を、永井和子先生自らが演奏とレクチャーで示してくださいました。特に最後に歌われたアンコール曲「そこにあなたがいてくださることは」の演奏に、会場は大変にあたたかな雰囲気を満たされ、盛んな拍手が送られました。

豊田喜代美

6. 日本声楽発声学会 2018年5月開催 第107回例会

B 特別講演

日 時 : 2018年5月27日(日) 13:00 ~ 15:00

会 場 : お茶の水女子大学 講堂(徽音堂)

講 師 : 加我君孝氏

講演テーマ : 「声帯の発見の歴史と最近の人工喉頭インプラント研究までの歌唱に関連した医学の動向について」

加我先生には、2012年5月27日、第95回例会(東京芸大)で、特別講演をいただいています。会員の方から、またお話をお聞きしたいとの要望が多く寄せられていました。

今回は、「声帯の発見の歴史と最近の人工喉頭インプラントまでの歌唱に関連した医学の動向」についてご講演を賜ることができました。歌唱に関連した医学史を、古

代エジプトから最近のIT技術による初音ミク、馬の反回神経麻痺の治療の人への応用のための研究開発まで、年代順にお聞きすることができました。内容は、次回の学会誌に報告されます。講演後は、会員からの多くの質問にお答えいただきました。改めて誌上をお借りしてお礼申し上げます。

加我先生の前回の特別講演、「音楽のための聴覚と脳のしくみ」は、声楽発声研究No.4（2013年発行学会誌）に掲載されています。音楽（歌唱）と医学の距離が近くなると思いますので、会員の皆様には歌の練習の合間に、次回の学会誌と合わせてご覧になられますことをお勧めします。

第107回例会・総会の会場は、永原恵三先生のご尽力により、お茶の水女子大で開催されました。最寄り駅は茗荷谷駅で、お茶の水女子大まで徒歩7分です。私にとっては、発声学会がなければ、お茶大に入らせていただくことはなかったと思っておりますので、とてもよい機会でした。当日は晴天、美しく保たれた歴史の深い講堂（徽音堂）で、素晴らしい講演、研究発表、演奏を、静かな環境でお聴きすることができました。宮崎から出掛けて本当に良かったです。

西浦美佐子

C 講座 現役声楽家の演奏とお話

講師：浜田理恵氏

2018年5月の例会では、浜田理恵氏によるレクチャー演奏が行われました。通常このコーナーは、演奏終了後、インタビューと皆さまからのご質問の形で行われますが、今回は、浜田氏のご希望で、発声の説明を入れながらのレクチャー演奏となりました。浜田氏は、たいへん豊かな響きと明瞭な発音で歌唱され、確かな歌唱技術の上に、美しく、魅力溢れる歌を披露してくださいました。

浜田氏は、「日本人に欠けるもの」という視点から、発声についてのお考えを以下の様々な点から発声法を示してくださいました。①日本語の特性である母音と子音の扱い②チェンジをうまく乗り切るテクニック③レチタティーヴォの歌い方④子音と母音をいかに安定させるか⑤アジリタのテクニック⑥言葉を息に乗せて歌うこと⑦アタックの仕方⑧歌う声とレチタティーヴォの声⑨バランスのとれた声とは⑩高音のピアニッシモのテクニック等、レクチャーの中で、これらの発声についてわかりやすく説明をしてくださいました。演奏テクニックをこのようにオープン解説して下さることは、またとない機会となったと思っております。

浜田氏は、東京藝術大学大学院修了後、パリに留学され、UFAM 主催国際声楽コンクールで第1位、第19回パリ国際声楽コンクールオペラ部門で第1位を獲得されました。オペラでは、国立パリバステューユオペラで、チョン・ミュンフン指揮のオネゲル「火刑台上のジャンヌ・ダルク」で絶賛され、以降数々のオペラに出演されています。私が浜田氏の歌唱を拝聴したのは、兵庫県立芸術文化センターで開催され

ました佐渡裕指揮の「蝶々夫人」タイトルロールでした。会場を包み込む一際豊かな声と表現力は、今でも甦ってまいります。

浜田氏は、2018年4月より、母校の東京藝術大学准教授として、後進の指導もされています。日本での演奏を聴く機会も増えていくと思われます。浜田氏の今後のご活躍を大変楽しみにしております。

虫明眞砂子

7. 日本声楽発声学会 2018年11月開催 第108回例会

B 特別講演

講師：岡田 孝氏

岡田孝先生のお話は、2014（平成26）年の日本音楽表現学会第12回（まほろば）大会において拝聴したことがありました。日本コロムビア・レコードの専属の童謡歌手として、輝かしく売れている半面に多くの苦悩があった点に衝撃を受けました。ぜひ、日本声楽発声学会でもお話していただきたいという私の思いが叶い、第108回例会の特別講演の講師としてお招きすることができました。

当日、岡田先生は、豊富な資料をご準備してくださいました。明治期の社会状況や学校教育の動向を踏まえた上で、唱歌や童謡がどのように広がっていったかについて分りやすく解説してくださいました。本篇では、「童謡歌手は、どのようにして童謡歌手になっていくのか、その日々は」についてお話してください、聞いている側もその世界に引き込まれました。足羽章先生、佐々木すぐる先生、松田トシ先生等の著名な先生方のレッスンを受けるために、お母様が深夜まで内職にいそしみ、体調を崩された場面では、思わず涙も出てきました。一方、スタジオでの録音のリアルなお話もあり、実際に当時の音源も拝聴することができました。会場からは拍手もあり、童謡歌手の岡田先生の歌声に魅了しておりました。コマーシャルで耳にしました「あかるいナショナル、あかるいナショナル」の歌声が岡田先生であった点も存じ上げませんでした。

しかし、変声期となり、12歳のとき、専属契約の解除となり、「二度と音楽の世界や、芸能界には入りたくない」と思われたそうです。

お母様の看病をしながら、大阪音楽大学声楽科に進学されます。卒業後は、カウンターテナーに声種変更し、海外でも演奏されました。最後に岡田先生のカウンターテナーの《Amarilli》のCDを拝聴しましたが、「最後まで聴きたいです」というリスエストもあったぐらいです。講演終了後も質問者が列を続き、大盛況でした。

今回、2時間の講演時間が本当に短く感じられました。その要因として、講演の内

容や資料はもちろんのこと、岡田先生の巧みな話術にもありました。大阪のアサヒカルチャーセンターの岡田先生の講座が大人気である要因が分かりました。

鈴木慎一郎

C講座 現役声楽家の演奏とお話

講師：小森輝彦氏（バリトン） 三澤志保氏（ピアノ）

小森輝彦氏の講義から、キーワードとなるところのご発表内容を掻い摘み紹介します。

「フィガロの結婚」より、3幕 伯爵のアリアから堂々たる歌声で始まりました。とりわけ技術的な発声にスポットを当てての講義、またその経験と研究を基に、現在教育の現場における問題点や指導についての講義を内容とされました。

17年間のドイツでの研修と活躍、12年間にわたりドイツの劇場の専属歌手として70演目を超えるオペラご出演、2017年にはドイツ宮廷歌手の日本人初の称号を得られておられます。専属歌手を目指しての最初のオーディションは、大挙して押し寄せる受験生の中からみごと抜擢「椿姫」(ヴェルディ)のジェルモン役で、プラハ州立劇場でのヨーロッパデビューとなりました。そこでの体験は、音楽劇場と契約するという日本にはないヨーロッパの劇場契約での希望が叶い、大舞台での初出演となりました。しかし劇場レパトリー制の出し物には稽古がなくビデオで段取りや動線を覚えて本番、しかし舞台では段取り通りにいかず、終了後尋ねると「あのビデオは10年前のもの」とか。ある意味でヨーロッパの劇場には優雅さや遊びがあり、洗礼を受けたようなデビューでありましたとか。ユーモアを交えて語られる体験の中で、日本人としてのメンタルギャップに向き合うご研究の方向は、日本人の持つコンプレックスである言葉の「発音」と「発声」との関係に着目されました。「母音と声」、母音をどのように定義付けるか、「子音と母音のギャップは何か」を分析する。分析心理学の河合隼雄先生の著書から「母音と子音の切断」というキーワードに辿り着かれました。河合隼雄先生のアプローチは宗教観からの分析です。日本は多神教で「包含」と云って要素や事情を包み込んで方向性を探ることに慣れている。しかし西洋の宗教観は、YesかNoのどちらかで、「切断」に慣れている。言わば子音と母音を切断して考えることが出来る、それが歌唱上の母音発声で伸びるベルカントに繋がる所以であると説かれました。母音と子音で一字という「日本的包含」にならないよう、切って、切って分析して発音するうちに「自分のもの」として、明瞭に歌唱法が出来上がってくる訓練法は大事な秘訣です、という説得力のある言葉は、本日歌われました曲のすべてにその唱法は徹底されており、語りかけるようなご演奏で聴衆を魅了されました。「東洋と西洋の違いの疑問を追い続けた17年間、コンプレックスに打ち勝つ大きな研究のキーポイントは言葉にあり、また持ち生まれた民族性を変えることは如何なる民族も出来ないことに気づくことで豊かになることが出来ました。」をもって締めくく

れました。

高く厳しい訓練ののちに得られた技術があつてこそその表現力と切実に思いますが、最後の日本歌曲「死んだ男の残したものは」(武満 徹)も理屈抜きに心に沁みる感動を覚えたご演奏であり、数々の体験から語られる説得力ある講義内容と共に大きな拍手をもって終了いたしました。

なお、ピアノの三澤志保氏の伴奏も、さすが長い本場でのご研鑽と以後の幅広いご体験がご自身の個性を生かしつつ、小森輝彦先生のご演奏に寄り添い、より色付けされ、格調高い表現が醸し出されたご演奏でありました。詳しくは、学会誌 声楽発声研究 No.10 号をご参照ください。

永井和子

8. 事務局便り

事務局長 川上 勝

まずは、冒頭で会員の皆様に心からお詫びをさせていただかねばならなくなりました。昨年の暮れに配信いたしました予備選挙の書類に不備が生じてしまいました。多くの人が関わって、細心の注意を払い、綿密に作成したつもりでしたが、それぞれの先生方が最も多忙な時期と重なり、最後の詰めを欠くことになってしまいました。会員の皆様にはさぞかし驚かれた事と思います。ミスに気付いた時には既に発送済みとなっていました。

ここに誌面をお借りしまして、衷心よりお詫びいたします。二度とこのような失態を起こさないように心掛けたいと強く反省しております。

さて、この度は、元理事長であられた丹羽勝海先生の訃報に接する事となってしまいました。永井会長や山田顧問から追悼のメッセージが寄せられておりますが、私からも、ここに謹んで哀悼の意を表します。

永年に亘り理事長職を務められ、私も丹羽理事長の頃から宮原先生の後を継いで事務局長を務めて参りました。途中で一期三年間退きましたが、永井会長になってから再び副会長と事務局長を務めさせて頂きました。

今期もあと数ヶ月で終わろうとしています。本当に長い間、皆様にはお世話になりました。私自身は、だいぶ歳を重ねてしまいましたが、次の若い世代の方々へのバトンタッチの為に、もう少し学会で頑張るつもりでおりますし、前理事長の米山先生の悲願であった、専門家としての「声楽発声指導者」(プロのヴォイスコーチ)の育成に向けて準備を進めて行く時が、いよいよやって来たと考えております。どうぞ宜しくお導きいただけますようお願いいたします。

9. 学会費納入のお願い

本学会の運営は皆さまの会費によって成り立っております。毎年5月例会までに納入いただくことになっておりますが、もし、未納の場合は、速やかに、下記口座にお振込みいただきますよう、お願い申し上げます。

振込先 郵便為替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

10. 編集後記

『学会通信』第41号をお届けいたします。本学会の要となつてこられた先生方の訃報が続きますが、時の流れは容赦がありません。しかし、後を引継いでこの学会をより実り豊かな集いにするために、皆が心を一つにするべきことを胸に刻め、とお教えくださっているようにも思います。この『学会通信』が会員の皆様の熱き心の通う場であることを願っております。

編集委員長 永原恵三

日本声楽発声学会事務局（担当：安原道子）

〒215-0003 神奈川県川崎市麻生区高石4-11-14-409（安原）

E-Mail：info@jars-voice.org

Tel/Fax：044-577-2037

日本声楽発声学会Webサイト <http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

日本声楽発声学会

学会通信 第41号

2019年（平成31年）3月25日発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：永原恵三

印刷所：よしみ工産株式会社東京営業所

〒113-0033 東京都文京区本郷3-26-1 本郷宮田ビル3F